

従来から大連は工業を中心に発展を遂げてきましたが、最近の動きから情報産業分野の急成長が注目されます。本年9月上旬に「世界経済フォーラム（所謂ダボス会議）」が大連にて開催され、欧米やインド・中国等の経営者が集い様々な議論がなされましたが、うち「中国のニューエコノミー：製造業を超えて」と題した全体会議の内容が新聞報道され、特に大連への期待が示されました。

本年上半期には大連GDPに占める比重で第3次産業が工業分野を超えた模様。その牽引役はソフトウェア開発とその他情報処理産業とのこと。欧米企業が間接事務部門を英語圏であるインドへアウトソースする流れがありますが、大連では豊富な日本語人材を活かし、日本企業からの受託にも取り組もうとしています。現時点で海外からの受託水準はインドの諸都市等に次いで大連は世界第5位（中国では第1位）ですが、更なる飛躍も見込めます。（1998年大連ソフトパーク開設時点では数百名のIT従事者、年収入1.7億人民元の業界規模でしたが、いまや従事者6万人、年間ソフト売上145億人民元（昨年）であり、年間50%という高成長を継続中です。）

大連の地元企業である億達集団が中心となり、現在ソフトウェアパーク2期の巨大開発が始まっています。従来のソフトパークは大連市の西部郊外に位置していましたが、更に西に向かって旅順近郊に至る一帯で森林を保全しつつも巨大オフィス群の工事を既に開始しており、数年前はジオラマでしか見られなかった構想実現が現実味を帯びてきています。

今回は巨大な開発ということもあり、

億達集団は香港系財閥と組んで一部を開発したり、シンガポール政府系企業「アセンダス」（インドでの実績大きい企業）と協力し開発に取組中です。先日はシンガポールのゴー・チョクトン上級大臣が来訪し、盛大に大連アセンダスITパークの開業式典があり参加して来ましたが、大連に住んでいる者にとってもこの一帯の激変には度肝を抜かされます。

NHKの特集番組で取上げられた大連で日本企業の経理・人事・仕入販売事務の受託等を行うインフォデリバ社も最近見学しました。しっかりしたセキュリティのなか若い中国人社員が懸命にパソコンに向かって作業している様子をガラス越しに見ることができました。極めて複雑または重要な事務や機密事項に関する業務等を除き、今後多くの日本企業が大連にある同社等への事務部門のアウトソースに着手することが予想されます。奇しくも大連が世界から注目を浴びた世界経済フォーラムの前後に株式時価総額で日本が中国（香港含む）に抜かれましたが、工場の次はオフィス業務の中国移転ないしは中国へのアウトソーシングが本格化すれば、大連の不動産価格上昇と反比例で東京・大阪のオフィス価格が下落に転ずるなどの事態も遠い将来にはあるかもしれません。それでも日本企業が生き残るためには避けて通れない道なのかもしれません。一方で、大連等の都市部でのオフィスワーカーの大量発生は中間層の急成長を意味するため、定期航空路線を確保している富山県への観光客誘致では長期的にはかなり期待が持てるところです。

変貌し始めた大連の産業地図

●富山県大連事務所 副所長 田中雄一